

# 東洋興業会長 松倉久幸さんの 浅草六区芸能伝

【第 65 幕】

先月号では、江戸川大学メディアコミュニケーション学部マス・コミュニケーション学科の西条昇教授の下で学ぶゼミ生達の主催で行われた、伝説の浅草芸人・深見千三郎ゆかりの地を巡るイベントの様相を紹介し、大変ご好評を頂きました。

記事を書くにあたり、イベントに参加した本誌記者が、後日江戸川大学にお邪魔し、あらためてお話を伺ってきたのですが、そのインタビュアーでは深見千三郎だけにどまらず、往年の浅草芸人に関する実に興味深い話が、次々と飛び出してきたそうです。

それもそのはず、大衆芸能史研究者、お笑い評論家としても活躍する西条先生は、大変ユニークな背景の持ち主。仕事のため浅草を訪れていた父親に連れられ、幼少の頃から浅草に親しみ、10歳にもなると、一人で劇場に出入りし、あらゆるお笑いの舞台を観て回っていたというのですから、驚きです(笑)。現在の職業は、まさに天職ですね。

西条：僕は昭和39年生まれなので、当時すでに浅草喜劇は衰退期でしたが、幸運なことに、ぎりぎりでアン助劇団も、深見千三郎さんも生で見ているんです。

自宅が飯田橋で、比較的どこへも出やすかったという環境もあり、小学校高学年になると、新宿や日比谷の劇場にも足を伸ばすようになりました。新宿フランス座で活躍していた石田英二さんや阿部昇二さんも新宿コマ劇場や明治座で見えますし、浅草フランス座から外に出て活躍していた佐山俊二さんの舞台も強く印象に残っています。

今では信じ難い話ですが、当時、芸能人の自宅が掲載された住所録が出版されていたんです。それを家が印刷所の同級生から入手した僕は、嬉々として大好きな芸人さん達に、片っ端からファンレターを書いて送りました。すると、小学生からの手紙がよほど珍しかったのか、何人かの芸人さんが、直筆でお返事を下さったんです。

由利徹さんから『今度ぜひ、楽屋に遊びに来て下さい。』というお返事を頂いて、実際に楽屋にお邪魔したこともあり、その時の手紙は今でも大切な宝物ですが、さらに嬉しかったのは、当時一番好きだった石田英二さんからのお返事でした。その手紙には、『君みたいな若いファンがいたとは、知りませんでした。僕のような地味な演技を評価してくれて、ありがとうございます。』と書いてあったんです。

そこで今回は、先月号では書ききれなかった浅草芸人に関する貴重なエピソードを、追ってご紹介するとともに、「浅草六区芸能伝」の次なる展開についても、お話ししたいと思います。

\*

— 幼稚園の頃から、お父さまに手を引かれ、花屋敷や松竹演芸場に行くのが、何よりの楽しみだったそうですね。

西条：はい。映画「男はつらいよ」シリーズも、物心ついた時から大好きでした。渥美清さんはもちろん、おいちちゃん役の森川信さんにも夢中になって、小学一年生にしてすでに寅さんマニア(笑)。渥美さんや森川さんのルーツが浅草にあると父から聞かされ、ああ、浅草にはこんな面白いおじさん達がいっぱいいるんだなあ。

— それから、浅草の劇場巡りをするように？

— 喜劇マニアの小学生としては、心に刺さるひと言ですね(笑)。

西条：阿部昇二さんからもお返事を頂きました。阿部さんは、コント55号の坂上二郎さんをフランス座に紹介した方で、欽ちゃん、二郎さんが先生と慕っていた芸人さん。小柄で目立つ存在ではなく、小学生の僕にはおじいさんに近いように見えたけど、動作にキレがあり、ちょこまかとした動きが面白かった。今にして思えば、あれが、体の動きで笑わせる浅草コントの特徴なんですよ。

由利さんは、当時大人気だったドラマ「時間ですよ」にも出ていたテレビのスター。でも、石田さんや阿部さんのことは、学校の友達も誰一人知らないから、話題を共有できる人がいなくて、寂しかったです(笑)。

— その経験は、大人になってから、大いに活かされたんですね。

西条：はい。お笑い評論家として萩本欽一さん、伊東四朗さんに初めてインタビュアーに伺った時、石田英二さんの話から入ったら、お一人とも一瞬ぼかんとささって、「なんで、君のよつな若い人が、石田さんを知ってるの!？」って、そこから話が弾んで。放送作家として立川談志師匠とご一緒した際には、佐山さんと八波むと志さんの「あらいやだ」

ンビ」のことを伺うと、談志師匠がご覧になったお二人のコントを目の前で再現して頂いたこともありました。

— 西条先生の中には、まだまだ、私達の知り得なかった浅草芸人達のお話が、宝の山のように隠れていそうですね（笑）。浅草大衆芸能史の貴重な記録としても、また、今後の浅草のためにも、これを機に、さまざまなお話を聞かせてただけましたら、大変有難いです。

\*

この連載もはや6年目となり、その間、ロック座・フランス座で活躍した芸人らの話題も多く取り上げてきましたが、実は、ずっと心にひっかかっていたことがありました。伴淳三郎、渥美清、長門勇、三波伸介、東八郎、萩本欽一、坂上二郎、ビートたけし（北野武）…と、のちに表舞台で日の目を見た芸人らについては、多くの資料や写真が残っており、エピソードにも事欠かないのですが、全国区の人気者になった者はほんの一握りであり、その陰には、浅草で同じように必死で頑張っていたいながら、パッとせず終わってしまった芸人が大勢いたのが現実です。

私は、この仕事に携わる者として、彼らにも同じようにスポットを当ててあげたい。テレビで活躍するような派手な存在ではなかったけれど、実演劇場で大爆笑をとっていた「いぶし銀」のような芸人達がいいたことも、ぜひ知ってほしいのです。〈浅草芸人〉は、表も裏も全部ひっくるめて、

〈浅草芸人〉なのですから。

今回、西条先生のお話に出て来た石田英二や阿部昇二らも、実力・人気を兼ね備えていながら、表舞台で注目されることなく終わってしまった芸人です。私の手元には、石田の写真は、池信一・東八郎と組んだ「丁稚トリオ」として数枚残っていますが、阿部に至っては、残念ながら写真や資料はほとんど残っていません。

彼らに関する記憶はむしろ、当時劇場に通っていたお客さんの心の中に、生き生きと存在しているのでしょう。

しかし、リアルタイムで生の舞台を見ていた世代（70代以上）が殆どでしょうか。も、だんだん少なくなっていくまですし、そのわずかな記憶でさえも、日々曖昧になってゆくのは、無理からぬことです。

そんな中で、子供の頃から浅草の実演劇場を巡っていたという、まだ50代の西条先生の証言は、我々にとっても、浅草大衆芸能の歴史としても、大変貴重なものになってくると思うのです。

そこで、特別企画を考えました。

今後2号に渡り、西条少年の目に映った昭和の浅草芸人たち、とりわけ「いぶし銀」系の浅草芸人たちについて、また、大人になってから知った彼らの背景についても、ご本人に筆をお預けし、書いて頂くと思えます。

さてさて…どんな面白いお話が飛び出して来るのか、今から楽しみでなりません（笑）。どうぞ、ご期待を！

我々と同じように、浅草を愛して止まない方とのお縁をきっかけに、浅草芸人の記録をこのような形で残してゆけることに、感謝です。

（口述筆記・インタビュー 高橋真以子）



▲東八郎（右）、池信一（中）、石田英二（左）、東洋劇場で人気を博した「丁稚トリオ」

▶八波むと志（左）、佐山俊二（右）、抱腹絶倒の「あらいやだコンビ」

